猫蓑通信

第131号

令和8年
（2026年）
10月30日発行
（年3回発行）

豊かな日本語の使い手である皆さんへ

武内道子

英訳のある詩歌や文章は日本語の特徴を垣間見させてくれる。母語として日常的に使いこなしている日本語は、日本人の認知行為の表れであるという視点に立って日本語を考えてみようと思う。「認知」とは、人が外界にあるものを心理的にどうとらえるかということである。ことばの使用は、それによって思考を形成するにしても、コミュニケーションを図るにしても、使い手の認知という深層のレベルと関連している。

母語使用の表れがその人の認知的視点に帰せられると考え、母語の日本語以外に、長年の英語教師として辛うじて理解できる英語と、ときに比べながら、諸現象の奥に潜む日本語の特徴を一緒に考えてみましょう。

一

まず、井上陽水の「青い闇の警告」の冒頭と、ロバート・キャンベル氏による英訳「Warning from the Blue Darkness」を見てください（ロバート・キャンベル『井上陽水英訳詩集』講談社2019）。

星のこぼれた夜に
窓のガラスが割れた
俺は破片を集めて
こころのように並べた

One night the stars spilled out.
A window pane cracked
so I picked up the pieces,
lined them up to look like my heart.

年初めの風なく暖かい昼下がりウオーキングに出かけた。30分も歩いたとき、上空白いものを見上げたとたん、前のめりに転んで両手、両ひざと顔を地面にぶつけた。眼鏡が壊れた。ツルのとれたフレームとレンズの破片（大きいものだけ）を集めてハンカチに包んでおいた。しばし後骨折の心配も縫う心配もなくなり、その残骸を見つめたとき、ふいに井上陽水の上記の詞が浮かんだ。正確にいうと浮かんだのは後の2行である。その時の自分の気持ちが重なり、「こころのように並べた」というくだりがわかったと思った。キャンベル氏の英訳は、最後の2行は私の心に必ずしも沿わないと思った。

説明するのは難しいのだが、英訳の方はガラスの破片を実際に取り上げて元の形になるように並べているような印象をもつ。私はといえば、破片を取り上げるのではなく元の形をこころの中で描き眺めていたというだけである。手と顔を汚された破片を取り上げようとする考えはまったくなかった。長年愛用してきた眼鏡の雄姿が、フレームがとても高価だったこともあって、惜しいことをしたという思いとともに、脳裏に浮かんだのである。「こころのように並べる」とは「自分のこころに重ねる」といった意味で、ばらばらの破片をつなぎ合わせて完全な形にするといった行為には言及しないものかと思う。

二

もう一つ、井上陽水の詞「傘がない」について、ロバート・キャンベル氏が作詞者と交わした対話を取り上げる。「I've Got No Umbrella」ではなく、「No Umbrella」としてほしいという作詩者の気持ちを汲み取れますか。

私はこの「傘がない」について陽水さんとこんなやり取りをしました。

RC　井上さんの……「俺」というのは、二人称で「君」に向けて歌っている歌の中や相手に語りかける歌の中に、自分というか、「俺はこうだ」と

●目次●

▼豊かな日本語の使い手である皆さんへ　武内　道子　1
◎第三十四回同人会総会　歌仙六巻　3
◎第百七十六回例会（猫蓑会総会）歌仙七巻　6
▼写真俳句・俳画に遊ぶ　由井　健　10
●事務局だより　12

いうのがいちばん強く出る気がするんです。「傘がない」もそうですよね。「僕」とか「俺」とか一人称は全然登場しませんが、「君の町にいかなくちゃ雨にぬれ」というのがある。

陽水　自分で歌っていていちばん感情移入しやすい感じっていうのは、「傘がない」で言えば、……「君に逢いたいんだ。逢いたいんだ」という切なさよりも、……「いや、人間として生まれるとこうなの？」という、そういう大きな感じのほうが感情移入しやすいですよね。

私はこの「傘がない」のタイトルを、I've Got No Umbrella と訳したのですが、これも陽水さんに「それは違う」と言われました。「いいですか、傘は象徴なのです。『俺』の傘ではなく、人間、人類の『傘』なのです。傘は平和や優しさだったりする。だからタイトルは No Umbrella でお願いします」

「I」だらけになった私の英訳には、余白がありません。「I」を抜くことで、「傘」は平和になり優しさにもなれる。とすると、つめたい今日の雨とは、何なんだろう。期限は書かれていないけれど、「この雨が降っている最中」、つまり止む前に行かなくちゃ、とあるがなぜそうなのか。（キャンベル著前掲書53〜54頁）

三

しばしば指摘されるが、川端康成の『雪国』の冒頭の文の主語はどこにあるのか。

サイデンステッカー氏の英訳には the train と明示されている。原文は第3文に初めて「信号所に汽車が止まった」と「汽車」が出てくるが、私たちは初めから汽車、しかも自分の乗っている汽車であることがわかっている。汽車に乗ってトンネルを抜け、雪国が目の前にはっと広がったという風景を描く。動いているのは自分なのである。漱石の『坊っちゃん』の冒頭部分「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かしたことがある」も行為の主体者、当然語り手の本人なのだが、主語としての一人称は出てこない。

四

金子みすゞの詩「お堀のそば」とその英訳を声に出してみてください。（詩　金子みすゞ／訳・英詩朗読 D. P. ダッチャー『金子みすゞ童謡集 Something Nice サムシングナイス』JULA出版局１９９９）

お堀のそば
お堀のそばで逢うたけど、
知らぬかおして水みてた。

きのう、けんかしたけれど、
きょうはなんだかなつかしい。

にっと笑ってみたけれど、
知らぬ顔して水みてた。

笑った顔はやめられず、
つッと、なみだも、止められず、

私はたったとかけ出した、
小石が縞になるほどに。

By the Ditch
She kept looking at the water.
Saw her by the ditch.

Yesterday we fought.
Today I miss her.

Flashed a smile.
She kept looking at the water.

Couldn't stop smiling.
Now I can't keep from crying

Lickety-split, run away,
Make the stones turn into s tripes.

声に出すと、原詩の方はリズミカルで心地よいが、音声が翻訳で零れ落ちるのは仕方のないことだとしよう。お堀のそばで喧嘩した相手は誰なのか。みすゞの詩は、幼い子ども同士の喧嘩と思わせるだけである。男の子同士でも、女の子同士でも、異性の相手でもいいのだ。読み手である自分の、その時の「そういう相手」に重ねて読む。一方、英訳の方は相手を女の子と決めている。そうなると、昨日喧嘩して今日は仲直りしたいと思っているという気持ちは、原詩とは微妙に変わってくるように思われる。行為者である「わたし」が英訳では、'we' を含めると3回明示されている。一方、原詩では最後にやっと顔を出しているのである（原文、英訳とも傍線・下線は筆者による）。逆に、ここの英訳では主語が明示的にされず、かえって「わたし」が強調されることになろうか。

原詩にあるのは、あの人と喧嘩したが仲直りをしたいといった「わたしの」意図的・積極的な気持ちというよりも、パントマイムのようにあれこれやってみせそれとなく気持ちを伝える、わかってもらいたいという感情であり、相手に求めているのもことばやしぐさではなく、共感だけであろう。

五

最後に、松尾芭蕉の有名な句をもち出そう。

古池や蛙飛び込む水の音

この英訳はかなりある。これまでも議論の対象になってきたことだが、「かはず（蛙）」は一匹なのか、何匹かいるのか。私たち日本人は誰も「一匹」と解釈しているのではないか。おそらく「数」のことは考えていない。「だって一匹なんでしょう」とか「なぜって、一匹としか考えられない」といった応答がかえってくる。一方、英訳は 'A frog', 'frogs', 'frog' の間でまちまちである。なぜ複数なのか尋ねたことがある。そのアメリカ人の応答は「何匹もポッチャン、ポッチャンと飛び込んだ方が賑やかな雰囲気になる」というものだった。単数か複数かの違いは frog の形を変えるだけでなく、使用する動詞も変えるのであるから（A frog jumps. Frogs jump.）、解釈の折彼らの脳裏には「数の意識」がしっかりとあるのである。

彼らの見ているものは私たち日本人の見ているものと違うとまではいかないまでも、ズレがあることは確かである。つまり、彼らが、蛙が飛び込むさまを、水しぶきを含めて見ているのに対し、私たちは、蛙が古池に飛び込む景色ではなく、飛び込んだ後の古色蒼然とした池とそこにある空や空気までも描いているのである。

（本記事は、猫蓑会員の武内道子氏が、ひつじ書房（房主・松本功氏も猫蓑会員）のウェブマガジン『羊草』に連載された「英語とともに日本語を考える」（全10回）の第1回表題タイトルに修正加筆したものです。「ひつじ書房　ブログ　武内道子」で検索していただくとすべての記事を読むことができます。—編集子）

第三十四回同人会総会 歌仙六巻　1

ソクラテスの座

歌仙「町の名の」　　高塚　霞　捌

町の名の耳になつかし濃紫陽花　　霞
　梅雨の晴間に集ふ連衆　　富子
ログハウス開いた窓へ椅子寄せて　　忠史
　遥かな嶺を描く絵手紙　　正夫
着流しでぶらりぶらりと月の客　　敦子
　おやまあ裾にゐのこづち付け　　有子
ウ　故郷は豊年祝ふ笛太鼓　　富史
　スマホ駆使して旅の計画　　夫
フランスへビジネスクラスのハネムーン　　夫
　姉さん女房で家内安泰　　敦
毎日が御役御免のひとりぼち　　有
　1DKの窓に寒月　　富
暦どおり穴に入らぬ熊もゐて　　史
　登校下校集団でする　　夫
カメラ据ゑドクターイエロー待ち構へ　　敦
　いつの間にやら時は過ぎ去り　　有
斗酒辞さぬ友も酔ひたる花莚　　史
　行つたり来たり親鳥は巣へ　　富
ナオ　自転車で御開帳見に善光寺　　夫
　トレッキングのウエア派手派手　　敦
熱気球大平原をゆうらりと　　有
　吊橋走るいたづらな猿　　富
もて話あいつはいつも盛りすぎて　　史
　口説き上手は咄家の性　　夫
可愛けりや何でも許してしまふのか　　敦
　推しに毎月貢ぐ十万　　有
献立は炭水化物控へめに　　富
　遠近両用眼鏡新調　　史
良夜なり読み耽りたる山家集　　夫
　外苑通り木の実降るカフェ　　敦
ナウ　キャスターの誰もが胸に赤い羽根　　有
　吹奏楽団歩調揃へて　　富
こつとんと水車米搗く軽やかに　　史
　道標には京へ二百里　　夫
花片を踏む藺草履の新しく　　霞
　プレパラートを覗くうららか　　敦

連衆　名古屋富子　根津忠史　國司正夫
　武井敦子　佐々木有子

タレスの座

歌仙「白靴や」　武井　雅子　捌

白靴やブランド街を軽快に　武井　雅子
　レースのバッグかける右肩　市野沢弘子
友からの旅の絵手紙飾るらん　岩崎あき子
　ひつくり返る太つちよの猫　壽子　弘
マンションの角すれすれに月昇り
　松茸飯をのぞきこむ子ら　雅　壽
ウ落鰻海へ下るを見届けて
　リベルタンゴの官能の脚　壽　あ
恋模様絡むでもなく纏ひつき
　やつと布哇（ハワイ）に行ける算段　雅　弘
図書館に調べ物して睡魔来る
　寒月かかる山の稜線　壽　あ
熊の仔がやうやく親に追ひついて
　思ひがけないことの次々　弘　雅
青空にダリの絵を見てあつけらかん
　けふも鴉がつつくゴミ箱　雅　壽
五百羅漢と飲めや歌への花の宴
　春の帽子は姉のお下がり　あ　弘
ナオ鰊群来雲の流れに占つて
　貧しき頃の時を引き寄せ　壽　あ
よく馴染む和服姿の棋聖戦
　細道の横川のせせらぎ　壽　弘
土地売つて現金全部押入れに
　ロマンス詐欺の彼は外人　あ　雅
甘き声氷いちごの溶けるやう
　夢の中まで追ひかける夏　壽　弘
九十歳過ぎた女性の横並び
　寄せては返しまた寄せる波　雅　雅
兎の目因幡国の月を見る
　心に沁みる雁の鳴く声　石　壽
ナウ漸寒の路面電車に乗り込んで
　進物の菓子皆が絶賛　あ　弘
地産地消大臣賞を幾度も
　FM放送名曲の旅　石　あ
花影に現忘れる根尾の谷
　握るラケットうららかな午後　雅　壽

連衆　市野沢弘子　岩崎あき子　杉山壽子
　林　転石

プラトンの座

歌仙「妖精の色」　野口　明子　捌

あぢさゐや棲む妖精の色ならむ　明子
　とうすみ蜻蛉へらへらと飛ぶ　肇
アコースティックギターの弦を張り替へて　香織
　ミルクティーには砂糖たつぷり　吉文
満月ののぞく座敷に眠る嬰　荷夕
　床の間の隅石の冷やか　織
ウヨイトマケ引く細腕にそぞろ寒　肇
　行商の婆ねぎらへば泣く　夕
よくできた少年宇宙飛行士に　文
　イデア世界に結ばれし愛　肇
お帰りのあとは理詰めで責められて　織
　膝の上へとのぼる黒猫　文
後拍のタンゴステップ軽やかに　夕
　ラ・プラタ川に高き冬月　織
三の酉景気をつけて日本街　肇
　親の代から秘書は大事と　夕
乗鉄のつどふホームの花盛　文
　蛤の吐く息の幻　肇
ナオ暮れかぬる縁の揺り椅子浅き夢　織
　からくり時計鳴るを楽しむ　文
奥儀書のことは語らず盃重ね　夕
　山また山の洞窟の果　織
男等のロマンはどこにあるのやら　肇
　四十八歳ひと夏の恋　夕
牧師への道を選びし許嫁　文
　何かにつけて妻は別格　肇
屋上に追ひ払つても鳩の来る　織
　箒逆さに凭せ掛けられ　明
洛外の念仏寺の十三夜　肇
　銀輪連ね爽やかな畑　文
ナウ違ひ棚榠樝かすかに匂ひ立つ　夕
　郵便局で配る石鹸　織
いつの間に印鑑いらぬ世となりて　文
　健康保持に続く鉄棒　肇
掌にハートマークの飛花を受く　明
　園児ら帰り残る春泥　夕

連衆　宇田川肇　平林香織　永田吉文
　西田荷夕

アリストテレスの座

歌仙「良き事の」　佐藤　徹心　捌

良き事の始めは今朝の時鳥　徹心
　未央柳を揺らすそよかぜ　桜千子
ふんはりのクリームパンに手が伸びて　美友紀
　通学鞄運ぶじやんけん　孝子
屋上の月がほしいとねだる声　鑑
　外が見たさに割れる毬栗　桜
ウ江戸つ子の秋の祭のひと暴れ　孝
　少し化粧の厚いちいママ　同
初デート燃ゆるほむらをいかにせむ　鑑
　天下泰平恋も上々　紀
日本語に馴れて働く東口　孝
　街歩く熊照らす満月　鑑
雪男消えたあたりを山と呼び　桜
　捜査一課の続く張り込み　孝
太極拳覚え人生すつきりと　鑑
　パイプオルガン鳴らぬラの音　桜
花の頃同窓会の知らせ来る　紀
　惜しい奴ほど早く逝く春　孝
ナオ高く高く揚がるやうにと紙鳶　紀
　鯉ゆつたりと立てるさざ波　鑑
マチュピチュへ地球半周はるばると　心
　同床異夢と知つてしまつた　桜
好きだから多少の嘘は目をつぶる　紀
　脱ぎしそびらに弁財天様　孝
空蟬は戻らぬものを待ちつづけ　桜
　帰省ラッシュで駅は混雑　紀
掏摸といふ家族養ふ生業に　孝
　十年振りに宝くじ買ふ　鑑
月光の蒼く異郷に病む五体　桜
　肩いからせて南瓜切り分け　孝
ナウうそ寒のラップの端のみつからず　同
　洋酒の瓶の形いろいろ　紀
道化師の人の笑ひに描く涙　孝
　喜怒哀楽は生活の糧　鑑
潮鳴りの丘に孤高の花盛る　心
　ニホンミツバチ宿る木の箱　紀

連衆　鵜飼桜千子　奥野美友紀　坂本孝子
　荒木　鑑

アルキメデスの座

歌仙「夏の雨」　田中　秀夫　捌

みづいろに地表を染めよ夏の雨　秀夫
　雫香るか梔子の花　葵
長年の旅のプランを練り上げて　純子
　百均グッズずらり揃へる　ひろみ
縁側の芋名月に眠る犬　濤声
　ほら流星と兄のつぶやく　葵
ウ秋寒のめんこを隠すあのアジト　同
　駆け落ち急いて着のみ着のまま　声
ＡＩと結婚すると届け出て　同
　アリストテレス深き困惑　葵
銀輪を連ねアルプス越えゆかん　純
　煙突ここと知らす凍月　み
湯上がりの珈琲牛乳手を腰に　声
　ありがたきかな五体満足　葵
ばあちやんの日課としたる畑仕事　み
　仏間の写真全部モノクロ　同
中学の受験戦争花の門　純
　雉笛吹けば雉が応へる　葵
ナオ松蟬と和平の知らせ流れきて　純
　一つ目小僧吹き矢当らず　声
念願のヘアドネーションバッサリと　純
　トンネルを抜け未知の行き先　み
小説はたいてい無駄なものながら　同
　余白にしておく羅の恋　葵
水中花昔のをとこ現るる　同
　御朱印帳のシール子が貼り　純
インバウンド歩道をあふれ車道まで　み
　乗り鉄撮り鉄みんな飲み鉄　夫
夕月はたたらの里にほんのりと　葵
　機織虫の見せるよき夢　み
ナウアルバイト時代祭の行列に　純
　三代目です家業傾く　み
思ひつき片つ端からみな忘れ　声
　塔は完成せぬがよろしき　純
渾身の力もて咲く花大樹　夫
　帆船はるか海はのどらか　声

連衆　石川　葵　近藤純子　江津ひろみ
　小原濤声

令和八年六月二十八日（日）
於　銀座ブロッサム

令和八年六月二十八日（日）
第三十四回同人会総会
歌仙六巻　6

ピタゴラスの座

歌仙「梅雨空の銀座」　宮川　尚子　捌

梅雨空の折りたたまれて銀座かな　尚子
　一番出口夏つばめ飛ぶ　洋子
デリバリーの白い自転車急ぐらん　千恵子
　娘の淹れる甘きモカの香　英雄
魂を揺らす笛の音窓に月　未悠
　絵手紙をかく木の実降る夜　英
ウ　重陽の宴とりどり菊尽くし　洋
　笑ひそびれてゐるくぼひつこむ　尚
門限を気にして過ごす彼の部屋　英
　小猫のやうに擦り寄つてみる　千
K―POPダンスステップややこしく　尚
　シューズ探してネットサーフィン　悠
寒月が琵琶湖の呼吸照らし出し　千
　正子愛した観音の里　洋
投資家はおいちよ株にも連勝中　悠
　指をくはへて濡れ縁に居り　英
花の下鳥罠かごに米を撒き　洋
　醤油濃いめの独活のきんぴら　尚
ナオ　丁稚どん腰に柄杓の抜参　英
　ローマ見ずしてとても死ねない　千
銭湯の「わ」の字「ぬ」の字を入れ替へて　尚
　移住計画火星への道　悠
痛風を抱へたままで長寿なり　千
　木下闇にはバンパイヤーが　洋
吸はないでそこだけはだめそこがいい　悠
　炎据ゑようこの浮気者　英
回廊のステンドグラスしづもれり　洋
　直角好きのピタゴラス君　尚
寄せ太鼓打てば上れる円き月　英
　子は蓑虫を箱にいつぱい　千
ナウ　プライドも眠らせてゐる暮の秋　悠
　柱時計の刻むかちこち　英
いくばくの酒さへあれば憂ひなし　千
　昭和歌謡の五臓六腑に　洋
降りそそぐ花はひかりの渦となり　尚
　春日傘さしそぞろ行く土手　悠

＊ナオ3句目銭湯の看板。「わ板」は沸いたで、営業中。「ぬ板」は抜いたで営業終了。

連衆　大島洋子　鈴木千恵子　鈴木英雄
　棚町未悠

千住大橋の座

歌仙「長良に溶ける」　近藤　純子　捌

雲の峰溶けて長良の水底へ　純子
　魚の影の速き梅雨明　転石
トランプのひとり遊びの切りもなし　香織
　ドレミの続くピアノ調律　鑑
ここかしこ月の竪琴響くやう　梅星
　松手入済みくつろげる縁　純
ウ　棟梁は茸談義をひとくさり　石
　ぼやきを聞いてゐるうちに惚れ　織
ビンビンと愛の鼓動の片笑窪　鑑
　涙ポロリと沈む夕陽に　星

第百七十六回猫蚤会例会
猫蚤会総会　歌仙　1〜3

月上る送電線に寒鴉　織
　子を慈しむ金目鯛の眼　鑑
区役所のカウンセリングを予約する　織
　一位指名に入れる断り　織
ひたすらに千日行者真言を　純
　晴れたみ空に新調の靴　石
見はるかす大海原と花吹雪　星
　樺太の地の鐘は朧に　鑑
ナオ　スプリングコートひ孫の宮参り　織
　錫のぐい呑み吟醸酒干す　織
物価高ナフサ不足に便乗し　織
　失敗しない女医の執刀　鑑
お揃ひの時計をはづす夏館　織
　蛍火照らす玉のかんざし　織
フェルメール魅惑の色の濃く深く　鑑
　何でも並ぶ習性の民　織
厨房で秘伝のたれを丹念に　石
　富士山過ぎるE席の窓　織
まん丸の月はどこまで吾を追ふ　石
　いづこよりかと小牡鹿を聞き　鑑
ナウ　やや寒の散歩短め元議員　同
　AIの出す答えちぐはぐ　石
コンビニのコーヒーうまし徹夜組　星
　折り紙奴二つ並べて　鑑
花おぼろ石垣の面風撫づる　純
　春の行方を知らぬ人なし　石

連衆　林　転石　平林　香織　荒木　鑑
　板垣　梅星

白鬚橋の座

歌仙「水まんぢゆう」　鵜飼桜千子　捌

三伏や水まんぢゆうの透けを喰む　桜千子
　猫は舐めをり片陰の石　孝子
ペンキ屋の屋根塗る梯子伸ばしゐて　吉文
　急ブレーキの音に驚く　英雄
海岸線遍く寄せる波と月　ひろみ
　旅の鞄を開く爽やか　孝
ウ 地芝居にテレビクルーのディレクター　み
　指名手配は丸刈りの奴　英
葡萄酒の真つ赤な嘘は罪深き　孝
　悔し涙にくれる後朝　英
突然に地震警報鳴り始め　文
　いつも無口な父のへそくり　孝
着ぶくれて熱烈に推すタイガース　み
　聖夜の霊園月光の降り　孝
異次元を行つたり来たり夢の中　み
　座敷童子と歌を交はしつ　英
山奥のそのまた奥に花の山　文
　便りを運ぶ黄蝶白蝶　同
ナオ 行平に汁たつぷりと眼張煮て　孝
　じつくりと聴く部下の提案　〃
ブランドの革靴を履きマメふたつ　み
　男殺すに只歩くだけ　孝
馬主を狙ふ港区女子らしい　桜
　懐妊メールあちらこちらへ　英
神からの甘さの残る舌下錠　桜
　首相官邸笑顔売るなり　孝
知つてるかい戦に負けたあの夏を　同
　もうこれ以上呑めぬ倖せ　英
月渡る高層ビルの窓すべて　同
　栗など供へ将門の塚　孝
ナウ 新発心の経つつかえる暮の秋　み
　叩けば落ちる自販機のお茶　孝
紙皿と紙のコップでゴミの増え　み
　慣れた仕草で婆の海苔干し　同
あこがれを旋律に変へ花ふぶき　桜
　素人将棋詰んで麗か　文

連衆　坂本孝子　永田吉文　鈴木英雄
　江津ひろみ

蔵前橋の座

歌仙「向日葵や」　武井　敦子　捌

向日葵やかんかん照りに頭垂れ　敦子
　入道雲の形大きく　洋子
プラモデル色をぬるのも楽しくて　明子
　シフォンケーキの香る食卓　秀夫
裏山に繊月かかり帰り路　惠子
　酸漿口に鳴らす子供ら　敦
ウ 赤い羽根みんな並んで声揃へ　洋
　散歩の犬がすぐに近寄る　明
ふと気付く心に深き爪の痕　夫
　あなたの海でどうにでもなれ　惠
モルジブのスイートルーム鳴る電話　敦
　月冴ゆる時謎の解けゆく　洋
神の留守ここぞとばかり酒を呑む　明
けふは大吉ＡＩの嘘　夫
秘境駅乗降０が続きをり　惠
　移住夢みて山羊の牧場　敦
故郷の花の便りの文字踊る　洋
　遠足に買ふちよつぴりの菓子　明
ナオ オープン戦ダッグアウトの春火鉢　夫
　昭和歌謡は今がブームと　惠
町会の健康麻雀勝ち抜いて　敦
　時に四人が三人になり　洋
皿屋敷うなじ美しお菊さん　明
　白夜に逢ふとかたい約束　夫
ハンモック揺れてついつい爆睡し　惠
　掛け子受け子が暴かれてゆく　敦
混沌の世界に届く神の声　洋
　母と思へば鸚鵡答へる　明
金木犀香りの先の月仰ぐ　夫
　いも煮の会は車座になり　惠
ナウ 虫すだく大和尼寺南無阿弥陀仏（なんまいだ）　敦
　やさしきひとの笑みもやさしき　洋
歴史書はいつも勝ち組好きに書く　明
　行こかやめよかラジオ体操　夫
朝一の花はもつとも美人とか　敦
　町にふはりと積もる淡雪　惠

連衆　大島洋子　野口明子　田中秀夫
　渡邊惠子

令和八年七月二十六日（日）
於　江東区芭蕉記念館

第百七十六回猫蚤会例会
猫蚤会総会　歌仙　4～7

両国橋の座

歌仙「蓮咲く」　石川　葵　捌

あかときの浄土はここか蓮咲く　葵
　ちよつと顔出す子亀親亀　忠史
パレットに二色の絵具しぼるらん　雅子
　父の跡継ぎ美術教師に　美智子
移住した古民家の窓月丸き　未悠
　箸を休めて虫の音を聞く　陽一郎
ウ 関取の束でかかへる懸賞金　史
　厚い胸板なんとなく好き　雅
雨の中傘も持たずに追ひかけて　智
　虎御前には五郎十郎　史
投資家の集める資金宇宙へと　悠
　冬の月夜のカード占ひ　陽
河豚にするそれとも茶漬けさあどつち　同
　路面電車の走るあの街　悠
曲がり角技能実習生に会ひ　史
　お稽古ごとの予定いつぱい　雅
三河弁丸出しにして花筵　同
　仏ほつとけめかり時なり　葵
ナオ 流れ来る盃おつと逃げられた　史
　探してるのはレアメタル層　悠
お宝の真贋見抜く鑑定団　智
　敗けに不思議な敗けは無いとか　史
人により好みいろいろみんないい　陽
　ベリーダンスのお臍可愛いく　智
意味深な夏風邪と甘噛みの痕　陽
　ごろ寝の爺に猫がのつそり　史
じつと待つトトロの森の停留所　雅
　時計を止める首相官邸　悠
おほかたを雲に預けて月今宵　智
　仰ぐ霊山神域の秋　雅
ナウ 唐梨は少し甘めに漬け込んで　史
　ボーカリストの好きな蜂蜜　智
石鹸で洗ふ両の手すつきりと　陽
　回転扉通り抜ければ　智
花の竿さして夢先案内人　葵
　朝採れ野菜うまき春の日　悠

連衆　根津忠史　武井雅子　聖成美智子
　棚町未悠　秋山陽一郎

新大橋の座

歌仙「真つ白な」　鈴木　了斎　捌

真つ白な音となりけり蟬時雨　了斎
　ひとりもゐない炎昼の道　をんみ
塾帰り団子一串頬張りて　有子
　売切御免地産名物　荷夕
宵の口柞の庭に月あがる　濤声
　祝ふ宴に新酒たのしみ　香里
ウ 割箸の四本からむ秋日和　里
　大社参道デート五回目　声
気合入れきりりと締めた博多帯　み
　越後屋のれん継ぐこととなり　有
高値付く蔵から出たる古文書に　声
　ペイペイ送金親にお願ひ　里
ふくろふの百八十度回る首　有
　北海道の厳寒の月　斎
好きなのは高倉健と荒れた海　声
　忠魂の碑を読んでたたずむ　夕
一村をやさしく包む花の雲　声
　縄文遺跡さへづりの中　夕
ナオ 春泥をはねて子供らかくれんぼ　み
　誘拐犯はすぐに捕まり　同
案外に地獄の涯は遠くない　里
　懲りもしないでまたも浮気を　声
カラオケでデュエットしてる偽夫婦　み
　カメラ向ければ顔をそむける　有
会議中上は背広で下寝巻　里
　壁に吊され南天の花　み
海霧(じり)晴れてゆつくりと来る貨物船　声
　横浜育ちそれが自慢さ　有
月光に十四行詩綴りつつ　夕
　紫煙たゆたふ新涼のバー　有
ナウ 石走(いはばし)る余市の水の爽やかさ　声
　公民館に迷ひ込む犬　夕
郵便馬車馭者の隣に相乗りし　有
　スプリングコート風になびかせ　み
散る花の旅路が空を埋め尽くす　斎
　一丁締めで仕舞ふ野遊　夕

連衆　福澤をんみ　佐々木有子　西田荷夕
　小原濤声　式田香里

清洲橋の座

歌仙「牛頭馬頭」　宇田川　肇　捌

夕涼や牛頭馬頭もゐる清洲橋　肇
　凌霄花伝ふ路地裏　美友紀
朗々と白文の軸詠みあげて　徹心
　コップの水をぐいと飲み干し　霞
海上に長く伸びたる月の道　裕司
　鴨の渡りに里人の笑み　肇
ウ　ばあちやんが丹精込めたうもろこし　紀
　監視カメラに黒い影さす　心
元カノが振り返りざまあんた誰　霞
　記憶の中の眉細きひと　司
少年の邪心を融かす春の月　肇
　供養針刺す餅のやはらか　紀
制癌剤投与はじまる木の芽時　心
　徳利の数確かめてをり　霞
雨あがるアンジェラ・アキのコンサート　司
　送迎バスはいつも満員　肇
花やぎの祇園七軒ひやかしに　心
　寝息を立てる兄と妹　紀
ナオ　最果ての地に厳かにイオマンテ　肇
　楢火の煙やけに目に染み　心
背戸の木戸人も訪はぬにギイと開き　霞
　満天の星仰ぐ天皇（すめらぎ）　肇
鈍行で歌枕など巡る旅　心
　突如崩れたベルリンの壁　同
幼稚園の砂場におもちや忘れられ　霞
　浮気の掟破り本気に　肇
私には熟れたメロンの記憶あり　司
　エピペン注射いつも離さず　紀
月の出を待てば祭の笛太鼓　霞
　夢のまにまに狂へ遊行忌　肇
ナウ　へうたんの形の池に錦鯉　紀
　臨時国会開かれぬまま　肇
米寿まで虫歯借金なくて済み　心
　名探偵は革張りの椅子　霞
図書委員ＰＯＰを飾る花の窓　紀
　高さまちまちとりどりの凧　心

連衆　奥野美友紀　佐藤徹心　高塚　霞
　小川裕司

永代橋の座

歌仙「命とはと」　髙山　鄭和　捌

命とはと考へる日の酷暑かな　鄭和
　金魚の泡のうかぶ水槽　千恵子
弓道場看的のこゑ響きゐて　あき子
　背をやはらかに抜けてゆく風　拓也
二次会を断り帰る月まどか　遊子
　記憶のかけらふらと蜉蝣　志保子
ウ　ハロウィンの衣装あれこれ工夫して　千
　うちのお宝ずらり贋作　あ
見廻りの警察官がやたら増え　拓
　駅前足湯ふたり並んで　遊
ベネチアでねだるダイヤのイアリング　志
　ビスコンティのフィルム荘厳　千
凍月に禰宜の拍手空気裂き　あ
咳ひとつ討入の夜　拓
百均で裾上げテープ買つておく　遊
　金継ぎクラスとても評判　志
花の宴とろりの酒を楽しまん　千
　湯葉弁当のうららかな午後　あ
ナオ　猫の子の鼻をすりすり手のひらに　拓
　うをに触ればアナフィラキシー　遊
高層の窓に光のさざめきぬ　志
　吸血鬼待つ漆黒の闇　千
きもだめし金太郎飴握りしめ　あ
　浴衣の袖に縋りつく君　拓
老いらくの恋のデータはまめに消し　遊
　危機を脱して逃げる狼　志
三度目の正直といふ人生訓　千
　潮の流れを丘に眺める　あ
満月はナフサ無くとも燦爛と　拓
　べつたら市の群に紛れて　遊
ナウ　そぞろ寒至高の剣を極めんや　志
　みかじめ料は口座振替　遊
世の中の不条理を問ふバンクシー　あ
　なまこの蔵のジャズと珈琲　同
花衣都大路を埋めたる　和
　お玉杓子をつかむ小さき手　遊

連衆　鈴木千恵子　岩崎あき子　藤澤拓也
　本多遊子　北龍志保子

春

はなやぎの
枝の先なる
薄霞


秩父清雲寺桜

六百年
老樹の私語の
うららけし


武甲遠望



秩父路や
春を知らせる遠汽笛

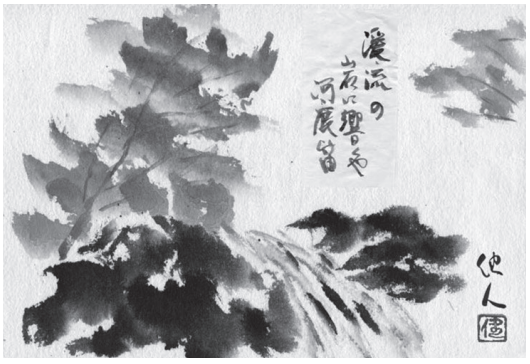
夏

船頭の
自慢の喉や
若葉風


三段峡遊覧

百尺の
岩壁抜けて
雨燕

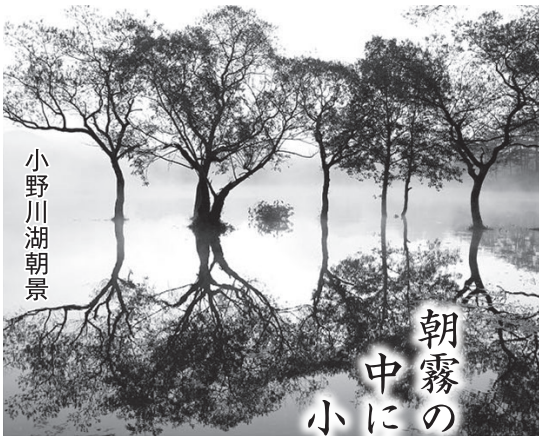

帝釈峡雄橋



渓流の岩に響くや
河鹿笛

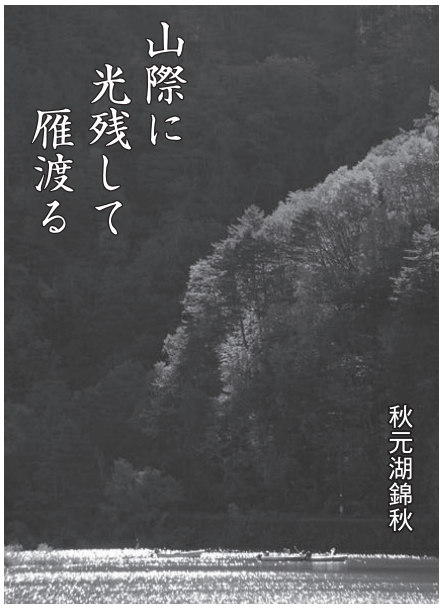
由井健さんの作品は、facebook でご覧になれます。
https://www.facebook.com/profile.php?id=100041352106105

由井 健 写真俳句・俳画に遊ぶ



朝霧の
中に消えたる
小舟かな

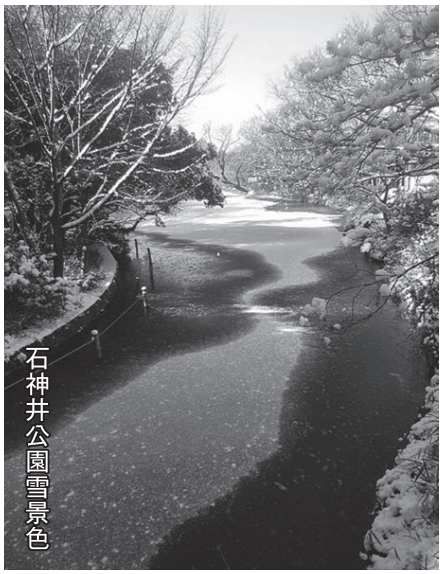
秋



山際に
光残して
雁渡る



草原に色なき風を
惜しみけり



一瞬の
後の静寂
しずり雪

冬

白鶴の
いざ北国へ
飛びたたん



久方の雪を喜ぶ
水脈二筋



事務局だより

●既往の行事

・六月二十八日（日）、銀座ブロッサムにて第三十四回同人会総会を開催。歌仙興行。当日作品は3～6ページに掲載。

・七月二十六日（日）、江東区芭蕉記念館にて第百七十六回例会（猫蓑会総会）を開催。歌仙興行。当日作品は6～9ページに掲載。

・十月十八日（日）、江東区芭蕉記念館にて第百七十七回例会を開催。第四十三回俳諧芭蕉忌正式俳諧張行後、源心興行。当日作品は次号に掲載予定。

●今後の行事予定

・一月三十一日（日）、銀座ブロッサムにて第百七十八回例会（初懐紙・立机披露）を開催予定。歌仙興行。

●猫蓑会リモート連句会

・第三十四回、第三十五回を、それぞれ、八月十一日（火・山の日）、十月十二日（月・スポーツの日）に開催。作品は猫蓑会HPに掲載。

・第三十六回、第三十七回を、それぞれ、十二月十二日(土)、二月十一日(水・建国記念の日)に開催予定。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございました

・深川連句会様　令和八年十月　十万円

・五十嵐譲介様　令和八年十月　一万五千円

＊基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●新入会員

・宇都宮リエ（東京都）　令和八年八月入会

・我妻（あづま）　景（兵庫県）　令和八年十月入会

●猫蓑作品集刊行のお知らせ

・『猫蓑作品集』第二十八号を来年刊行します。作品提出締切は四月末です。掲載は、会員一人一巻、宗匠は二巻までとします。詳細は次号に掲載予定。

●正式俳諧の一部立礼化について

・昨今のさまざまな事情から、芭蕉記念館和室での正式俳諧興行を、一部立礼で行いました。献花と献香に花台と座卓を使用しました。

・花台は、会員の五十嵐譲介氏が杉材を使って製作してくださいました。この場を借りて御礼申し上げます。



●朝日カルチャーセンター「座の文芸・連句」（「連句入門講座」を改称）のご案内

・毎月第一・第三土曜日（月により変更あり）午前十時から二時間、新宿住友ビル10階にて開講中です。

〈講座案内のチラシより〉

昭和五十六年の（編集子注・東明雅先生による）講座開設以来、理論はテキストによって構成・法則などを解説し、実作はクラスの中に「座」を作り体験を重ねられるようにしております。

・前半の理論編を鈴木了斎氏、後半の実作編を鈴木千恵子氏が担当しています。

・興味のある方は、「朝日カルチャーセンター」のホームページの上にある「キーワードや講師名で探す」の検索窓に「連句」または講師名を入れて検索してみてください。

●百三十号の訂正とお詫び

・9ページ下段の正式俳諧の配役を以下のとおり訂正します。関係諸氏にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

誤　配硯　近藤　純子
正　配硯　篠塚　雅世

定期刊行　『猫蓑通信』第百三十一号
令和八年十月三十日発行
発行人　猫蓑会　鈴木千恵子
事務局　佐々木有子
〒161・0033
東京都新宿区下落合4・9・34・313
編集人　平林香織
編集委員　奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・武井雅子・田中秀夫（五十音順）
印刷所　関東図書株式会社